ポケット・ジョーク

ブラック ユーモア

植松 黎 編・訳

© 1981 Bob Zahm

ポケット・ジョーク⑤

ブラックユーモア

植松黎（うえまつれい）＝編訳

角川文庫 4479

昭和五十六年二月五日　初版発行
昭和五十六年六月十日　四版発行
発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話東京二六五—七一一一（大代表）
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八
印刷所——旭印刷　製本所——本間製本
装幀者——杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。
本書より無断転載を禁ず。
Printed in Japan 0198-242705-0946(0)

ポケット・ジョーク⑤

ブラックユーモア

植松 黎＝編訳

角川文庫 4479

目次

I　お寒い国からやってきた失敗　五
II　ハレンチ・コネクション　二九
III　アンタタチャイバルナ　四九
IV　人の死に行く花道　六九
V　あなたが煮た人　九一
VI　汝の隣人を敬え　PART1　一〇三
VII　汝の隣人を敬え　PART2　一三五
VIII　俺たちにお銭(あし)はない　一四九
IX　墓に妻を投げろ　一六九
X　おさらば愛(いと)しき女(ひと)よ　一八九
あとがき　二〇五

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I

お寒い国からやってきた失敗

新しい学説

歴史上最も高度な発展段階に達した社会が、ソビエトだと、ロシア人は教えられている。つまり、パラダイスだと教えられているのである。ロシア人たちはそれを信じて疑わない。もっと正確に言えば、疑うことを許されていない。

あるロシア人学者は長年の心血をそそぐ研究によって、人類の祖先であるアダムとイヴもロシア人だったことを発見し、それを証明した。その学説――アダムとイヴは着るものを持っていなかったし、住む家もなかった。食べるものといったら、リンゴがあるばかり。それなのに、彼らは、自分たちがパラダイスにいることを信じて疑わなかった。まさに、彼らがロシア人だったから、としか考えようがないというのである。

名誉

「バーリントンほら吹きクラブ」は、最も有名なほら吹きの団体のひとつである。毎年一回「ほら吹き世界選手権大会」を催し、優勝したほらは全国の新聞に発表される。米国人だけでなく、世界中の国々にメンバーを持っている。ただ、どういうわけか、ソ連にだけはひとりもメンバー

がいない。

あるとき、モスクワの新聞「プラウダ」の記者が、この理由を説明した。（因みに、プラウダとは、ロシア語で「真実」という意味である）

「理由は簡単だね。ソ連には嘘つきがひとりもいないんだ」

バーリントン・クラブは、この記者に名誉会員証を贈ったのである。

ロシア的性格

ソビエトの学校で教師が生徒にアメリカについて質問した。生徒は起立して、アメリカでは失業者が充満し、労働者は常に飢えていること、アメリカ南部では黒人に対するリンチが毎日のように横行していること、犯罪が多発し、社会生活は危険がいっぱいで、酔っ払いや麻薬常習者やギャングが昼日中から街なかをうろうろし、好戦主義者がのさばりかえって戦争だ、戦争だと吠えたてている、と答えた。

「よろしい」教師が言った。「それではこんどはわが国がとなえ実行しているスローガンを言ってみたまえ」

「ハイ」生徒が答えた。「アメリカに追いつき、追いこせ、であります」

偉大な発明家たち

外国人旅行者がソビエトの首都モスクワを訪れクレムリンを見学した。二枚の肖像画がかかっているのを見て、これは誰の絵かと尋ねた。

「こちらの方は」ガイドが説明した。「あのわが国の偉大な発明家イワノフの絵です。ソ連の百科辞典によれば、彼はレーダーを発明しました。ラジオ、テレビジョン、原子爆弾も発明しました。電気を発見したのも彼ですし、自動車、飛行機、それに大量生産の法則も彼が発明、発見したのです。彼の発明、発見はその他にも数えきれません」

「こっちの方は誰なんだね」旅行者がもう一枚の絵を指して尋ねた。「この人はどんなことをやったんだい」

「この方はグレゴリーです」ガイドが答えた。「彼もまたわが国の誇る偉大な発明家です」

「イワノフとどちらが偉大なのかね」旅行者が尋ねた。

「ああ、そのことですか」ガイドが答えた。「グレゴリーは百科辞典を発明した人なんです」

高度の国

ソビエト国民であることは、ジェット旅客機の乗客のようなものだ。いつも前方に美しく限り

なく広い地平線を持っているが、胃袋がカラッポでも、外に出ることができない。

直談判

「ラジオの放送を聞いていると」とロシア人がもうひとりのロシア人に言った。「わが国ではたくさんの肉やミルク、バターなどを生産しているといつも言っている。それなのにおれんとこの冷蔵庫はいつもカラッポだ。いったいどうなっているんだ？　どうしたらいいんだろう？」

「なるほど」もうひとりのロシア人が答えた。「それなら冷蔵庫のプラグを直接ラジオに差し込んでみるんだね」

祈りの結果

ロシア共産党の幹部が田舎道を車で走っていた。ふと窓の外を見ると、年老いた百姓が畠の中にひざまずいて祈っているではないか。

幹部はただちに運転手に車を止めさせ、百姓をしょっぴいて来るよう命じた。

連れて来られた百姓に彼は言った。

「おまえは、畠を耕しもせずお祈りなどしおって時間をムダにしておったな。党のためにならん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

やつだ」
「ですが、党幹部の旦那、わしは党のために祈っておりましたのじゃ！」
「党のために祈っていただと？　なにをぬかす。むかしきさまはきっと皇帝のために祈っておったんだろう」
「その通りで、党の旦那」
「皇帝がどうなったか、考えてみろ！」

問題

シベリアの流刑地。銃をかまえた兵士の前にひとりの男が立たされていた。黒い布で目かくしをされるときに、男は最後にひと言しゃべらせてもらえないか、と指揮官にたのんだ。
「よろしい」と指揮官は言った。
「ブレジネフの野郎は、嘘つきで泥棒の碌でもないいかさま野郎だ。人民の敵だ！」
指揮官はまっ赤になって男のそばに歩み寄り、大声でどなった。
「やめろ、同志。この上さらに問題を起こしたいのか？」

©1980 Walter Gallup

共産主義的人間

ブダペストの街でふたりの男が立ち話をしていた。彼らは路上に駐車していた新しい自動車を讃嘆していたのである。

「すばらしい車だ」ひとりが言った。

「そうです」もうひとりが答えた。「この車もまた、共産主義社会の優位性と技術の熟練を示す立派な証拠ですな」

「なんですって」男はびっくりして言った。「この車はアメリカ製ですよ。見てわからないんですか」

「もちろん知ってますよ」もうひとりの男が答えた。「だけど、私はあなたがどんな人か知りませんからね」

労働条件

東ドイツから生命がけで脱出して来た男がニューヨークのある工場で働くことになった。工場主が仕事の内容を説明し、週六日一日十二時間ずつ働いてもらいたい、と言うと、亡命ドイツ人

は色をなして怒り出し、断わった。

「おれは生命がけで逃げ出して来たんだぞ。なんだってパートタイムの半端仕事をやらなきゃならないんだ？」

気をつけろ

ヒットラー支配下の時代のドイツでのことである。喫茶店に五人の男が座っていた。めいめいそれぞれ物思いに沈んでいた。

そのなかのひとりが深いタメ息をついた。もうひとりが悲しげなうめき声をあげた。三番目の男は、いかにも絶望したというふうに頭をふった。四番目の男は眼にいっぱい涙をためた。

五番目の男がびっくりしてささやいた。

「友人たちよ、気をつけろ。こんな場所で政治について語るのは危険だぞ」

同病

ゲシュタポがユダヤ狩りで猛威を振っていたナチスドイツ。二人のユダヤ人がミュンヘンの通りを歩いていると、警官が向うからやって来るのが見えた。一人はちゃんとした書類を身につけ

ていたが、もう一人は持っていなかった。書類を持っている方のユダヤ人が全速力で走り出した。警官が彼を追いかけているうちにもう一人を逃そうというわけだ。警官はまんまと罠にかかり、逃げ出した男を捕え、書類を要求した。書類がちゃんとしていることがわかると、警官はなぜあんなに全速力で駈け出したか理由をたずねた。

「わたしは下剤を服んだところだったんです」とユダヤ人は言った。「わたしのかかりつけの医者は、いつもわたしに下剤を服んだ後は走った方がいいと言います」

「しかし、貴様は本官が後を追いかけているのを見なかったわけではあるまい？」

「もちろん、見ました。でも、わたしは、あなたもわたしと同じ医者にかかっていて同じ下剤を服んだのだとばかり思ったのです」

下宿

第二次世界大戦でパリがドイツ軍に占領されていたときのことである。ナチの将校が二人、セーヌ川左岸にある下宿屋街に宿泊することにして一軒の下宿屋を選んだ。下宿屋のおかみは熱烈な愛国者で、ナチの将校を下宿させるのは気がすすまなかった。

二人のナチが、おかみの家に対して言った傲慢無礼な言葉を聞いて、おかみの気持は怒りに変ったのである。

「この豚小屋、いくらで貸すんだ？」とナチは言ったのだ。

間髪を入れずおかみは答えた。「そうさね、豚が一匹なら百フラン、二匹なら二百フランだよ」

証明書

アメリカ人とメキシコ人がある国際機関の建物の掃除夫に応募し、二人とも採用されることに決った。しかし、メキシコ人だけは、ちゃんとした身許及び経歴証明書を提出するようアメリカ人の事務局長は要求した。

メキシコ人は不公平に腹を立てたが、喧嘩（けんか）しては元も子もなくなると思い、八方駈けずりまわって書類を用意した。

事務所は大きな高層ビルの九十八階にありときどき非常階段を掃除しなければならなかった。ある風の強い日、二人は非常階段の手すりを拭（ふ）いていたが、凄（すさ）まじい突風が襲った。アメリカ人の掃除夫は運悪く手すりの上に身をのり出していたため、風にあおられ、バケツと雑巾を持ったまま、真っ逆さまに地上に墜落して行った。

手すりにしがみついてこの様子を見ていたメキシコ人は、風がおさまるとすぐさま事務局長のところへ飛んでいった。

「ほら見なせえ」とメキシコ人は勝ち誇って叫んだ。「あのアメリカ人の野郎め、あんたのバケ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com